

「2025：日中関係に春が訪れるか」国際学術シンポジウム 山梨学院大学で開催

2025年 国際シンポジウム
2025：日中関係に春が訪れるか

開催趣旨

トランプが再びアメリカ大統領に返り咲きになったことにより、国際関係に不確実性が漂い、世界諸国がどのように対応するかをめぐって迷い続ける中、日中両国は右派政権日本総理大臣と親中平派首相が昨年11月に会談し、両国の間接的な土地紛争の解決に関するコンセンサスに達したことを契機に、両国間外務省の中国訪問、自衛隊、公使館という日本と中国との関係構築の基盤を両国の両方から築き上げるという一連の作戦で、日中両国の関係は冷え切った状態から温まり始めるような雰囲気の流れが感じられます。この流れはどのように発展していくか、両国の学術界をはじめ、民間レベルから多様な関心が寄せられ、さらにはどう対応すべきかと懸念しているものが多いと考えられます。これを機に、本学国際共同研究センターは東洋大学日本研究センターの学者をはじめ、日中両国の学者を招き、文化、外交、経済などいくつかのセッションを通じて、議論を行い、両国の関係を対話で進めるために知恵を集めようとしています。

開催情報

日時
2025年 3月 11日(火) 9:30～17:30

場所
山梨学院大学クリスタルタワー 8階会議室

申込方法 (事前予約制)
当日ご自由に参加してください

主催・共催
主催 山梨学院大学国際共同研究センター・山梨学院大学大学院社会科学部
共催 南開大学日本研究センター・復旦大学日本研究センター
北京大學日本研究センター・清華大学日本研究センター

お問い合わせ
E-mail: ysu.irc@c2c.ac.jp

参加無料

2025年 国際シンポジウム
開催次第

一 開会式
司会: 橋 達彦(山梨学院大学国際共同研究センター・センター長、法学部特任教授)
開会挨拶: 青山 貴子(山梨学院大学学長、教授)
開会挨拶: 劉 岳兵(南開大学日本研究センター長、教授)

二 基調講演: 高野 明生(東京大学名誉教授)

三 シンポジウム

第1セッション
司会: 實川 和子(山梨学院大学国際共同研究センター・研究員、法学部教授)
報告①: 宋 志勇(南開大学日本研究センター所長、教授)
報告②: 李 延江(清華大学日本研究センター所長、教授)
報告③: 高 嶺(山梨学院大学国際共同研究センター・研究員、法学部教授)
報告④: 栗原 和彦(静岡国立大学客員教授、元オランダ駐在日大使、元外務省条約局長)

コメンテーター: 劉 星(山梨学院大学国際共同研究センター・副センター長、法学部教授)

第2セッション
司会: 野村 千穂子(山梨学院大学国際共同研究センター・研究員、経営学部教授)
報告①: 張 玉東(南開大学日本研究センター所長、教授)
報告②: 丸川 知雄(東京大学教授)
報告③: 陳 耀(山梨学院大学国際共同研究センター・研究員、経営学部教授)
コメンテーター: 今井 久(山梨学院大学国際共同研究センター・研究員、経営学部特任教授)

第3セッション
司会: 李 春福(北京大學日本研究センター・所長、北京大學國際關係學院教授)
報告①: 劉 岳兵(南開大学日本研究センター 教授)
報告②: 木村 知憲(北東アジア国際研究学会主幹(個人研究会)、元NHKアナウンサー)
報告③: 佐藤 社志(山梨学院大学国際共同研究センター・研究員、経済教育センター特任准教授)

コメンテーター: 胡 令遠(復旦大学日本研究センター・所長、教授)

総合討論:
司会: 宋 炎(山梨学院大学国際共同研究センター・客員研究員、君臨大学教授)
報告者全員

四 閉会式
司会: 劉 星
総 括: 高 達彦
閉会の辞: 太郎 高 達彦(山梨学院大学大学院社会科学部研究科長、経営学部学部長)

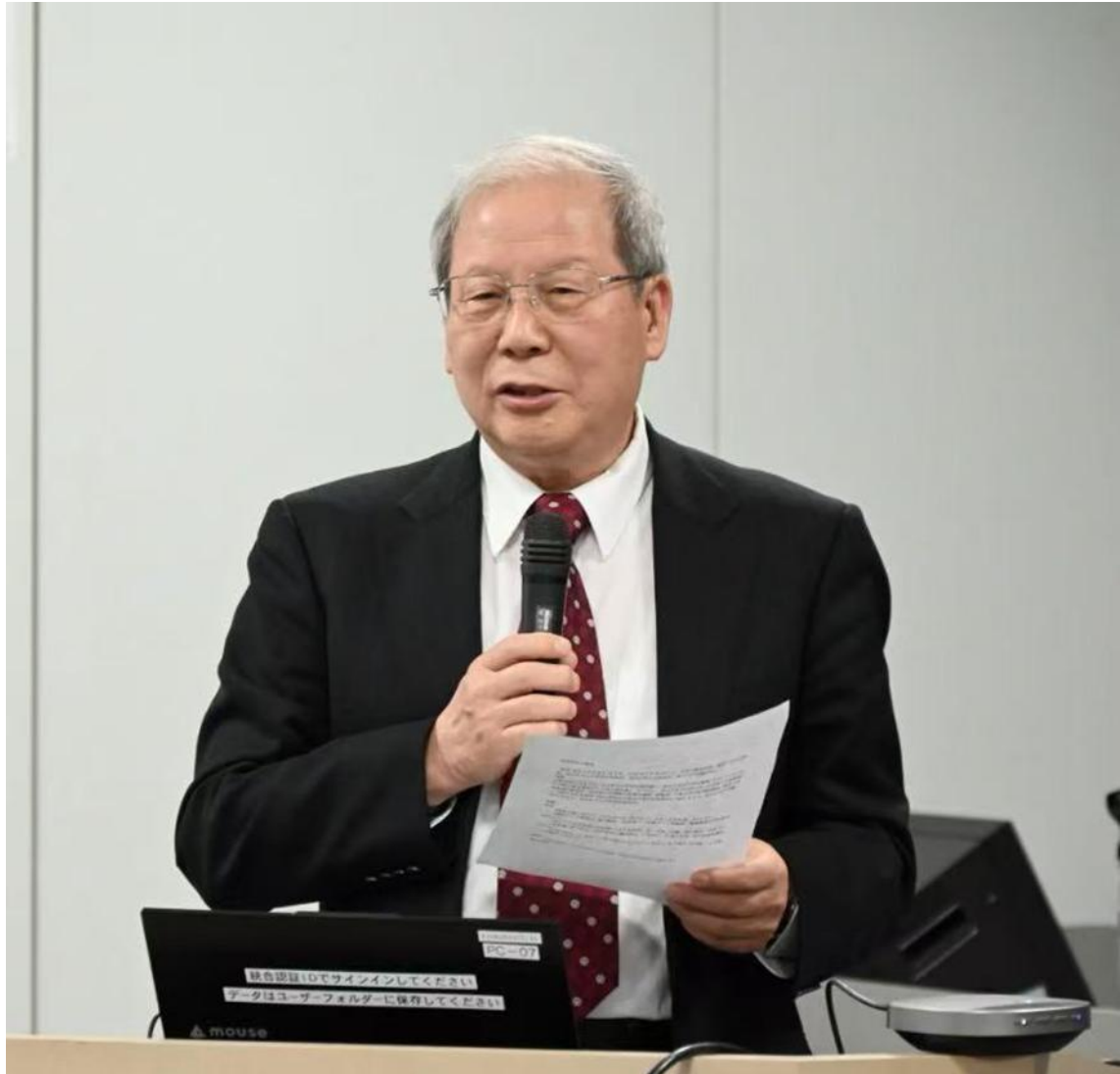
五 懇親会

2025年の早春3月、山梨県は三寒四温にあるが、11日、山梨学院大学クリスタルタワーで「2025：日中関係に春が訪れるか」と題する国際学術シンポジウムが成功裏に開催されました。会場に盛り上がった熱い雰囲気により、屋外の寒さは少しも感じられませんでした。



今回の国際学術シンポジウムは、山梨学院大学国際共同研究センターと大学院社会科学

研究科が、中国の南開大学日本研究院、北京大学日本研究センター、復旦大学日本研究センター、清華大学日本研究センターと共同で開催されたものです。中日両国から政治、経済及び文化研究に従事する十数名の学者・専門家が学術報告を行い、コメントを行いました。



国際学術シンポジウムは山梨学院大学国際共同研究センターセンター長、法学部特任教授熊達雲により主催し、山梨学院大学青山貴子学長、南開大学日本研究院劉岳兵院長がそれぞれ開幕の辞を述べました。



青山学長はあいさつの中で、今回のシンポジウム開催の目的を紹介し、中国の著名大学の専門家と学者が日本にお越しし、日本の専門家と学者と日中関係を議論、検討することに重要な意義があると高く評価しました。劉岳兵院長はあいさつの中で唐代の詩人たる全済時が著した「最澄上人を日本国に送る」五言律詩にある「家と扶桑近く、煙波、望不尽」の詩句を引用し、中日両国は隣接していながら、不安定要素も存在していると指摘しました。また、南開大学の創立者である張伯苓元学長が95年前に発表した『日本研究談』の中で、「中日両国はそれぞれ世界で存続していくようにするためには、互いに扶助しあうべきであり、互いに疑い合ってはならない。もし互いに疑い合った場合に、相殺しとなり、自殺すること外にならない」と戒告し、中日両国は相互理解、相互尊重、相互扶助を行うべきだと強調しました。



シンポジウムは外交、経済、文化という3つのセッションに分けて行われました。外交セッションでは、計4人の学者が報告を行いました。南開大学日本研究院前院長の宋志勇教授は「故きを温め新しきを知る：中国における改革開放という国策の形成と日本の寄与」、清華大学日本研究センター主任/日本中央大学教授の李廷江氏は「学問共同体の構築と東アジア

アの理解と平和—中国社会科学研究会と日本国際文化会館を中心に」、山梨学院大学国際共同研究センター研究員、法学部教授の高蘭氏は「日中関係におけるアメリカの要素『pay to play』 v.s 『play to play』」、静岡県立大学客員教授/元駐オランダ日本大使/元外務省条約局局長の東郷和彦氏は「トランプ 2.0 と日本の対中外交の展望」をそれぞれ行いました。



経済セッションでは、南開大学日本研究院副院長の張玉来教授、東京大学社会科学研究所の丸川知雄教授、山梨学院大学国際共同研究センター研究員/経営学部劉曙麗准教授が学術

報告を行いました。彼らの報告のタイトルはそれぞれ、「日中経済関係の現状と新たな課題」「日中経済関係の展望」「米中 AI 開発の競争と日本の対応」となっています。



文化セッションでも 3 人の学者が学術報告を行いました。報告者とタイトルはそれぞれ、南開大学日本研究院院長劉岳兵教授「日本における中国の芸術文化の受容と変化に関する新たな展開について—篆刻を中心に—」、北東アジア動態研究会主宰/元日本 NHK アナウンサーの木村知義氏「日本マスメディアにおける中国報道から考える両国民の相互理解の行方について」、山梨学院大学国際共同研究センター研究員/共同教育センター佐藤壮広特任准教授「現代日本文化の中の中国文化表象～ポピュラー・カルチャーから比較文化研究・交流の可能性を探る～」となっています。



野村千佳子（山梨学院大学国際共同研究センター研究員/経営学部教授）、實川和子（山梨学院大学国際共同研究センター研究員/法学部教授）、李寒梅（北京大学日本研究センター前所長、北京大学国際関係学院教授）がそれぞれ三つのセッションで司会を務めました。



コメンテーターは劉星（山梨学院大学国際共同研究センター副センター長/法学部教授）、今井久（山梨学院大学国際共同研究センター研究員/経営学部教授）、胡令遠（復旦大学日本研究センター前所長/教授）が務めました。報告終了後、朱炎（山梨学院大学国際共同研究センター客員研究員、元拓殖大学教授）主催の下で総合討論が行われ、報告の中のいくつか

重要な観点について質疑応答が行われました。



報告者、コメンテーターは会議のために入念な準備をしました。日中両国の経済協力、人文交流の友好歴史を振り返るもの、現在の日中間にある矛盾の所在とその形成の根源を重点的に分析するもの、日中関係に影響を与える第三者の要素を検証し、日中関係の改善に対する自分の思考を示し、そして相互理解を深め、相互信頼を増進する多くの新しい提案と対策を出したもの等々、百花咲き乱れる様態を呈しました。要するに、今芳しくない日中関係を苦境から抜け出し、日中両国の協力、発展と平和のために良好な国際環境と条件を作り出すためにみな知恵を貢献しようと努めています。コメンテーターたちは報告者の報告に対してきめ細かく正確な評価を行い、素晴らしい部分に対して画竜点睛的な評論を加えることにより、参加者は報告に対する理解をさらに深めることができました。



シンポジウム開始前、東京大学名誉教授、東京女子大学特別客員教授の高原明生氏により「日中関係の現状と展望」と題する基調講演を行いました。高原氏は講演の中で、中日関係が複雑に入り組んでおり、「国内政治、経済利益、国際環境と安全、国民感情」といった四要素モデルを分析の枠組みとすべきだとし、この四要素は相互作用し、それぞれの要素の変化により日中関係に影響を与える可能性があるとは指摘しました。この分析の枠組みに基づいて、日中両国の国内政治の変化は日中関係に大きな影響を与え、貿易と投資は両国関係の安定に影響を与える重要な要素であり、国際環境、特に米国の対中政策は日中関係にさらに波及し、相手国に対する民衆の感情と認識も両国の政治、外交に影響を与えると唱えました。

彼は日中関係に存在する多くの矛盾を分析・検討した上で、日中関係には競争と協力が持続し、両国は戦略的にバランスを保ちながら関係の安定を維持する必要があるとあり、競争の激化と協力の深化に対応すると同時に、これらの矛盾に耐える戦略的忍耐力が必要だとし、両国の平和を守るために、双方は互いの立場の違いを理解し、適切な政策判断を下し、対話を継続し、相互信頼を構築し、総合的かつ建設的な戦略的互惠関係を実現する必要があると強調しました。



劉星教授の主催の下、熊達雲氏が短い会議の総括を行い、山梨学院大学大学院社会科学
研究科科長の太郎良留美教授が閉会の辞を述べ、シンポジウムの企画者、報告者、コメンテ
ーター、来場者に感謝の意を表し、シンポジウムの成功を祝福しました。



シンポジウム開催の前日、山梨学院大学の経営主体である C2C Global Education Japan 古屋光司理事長は中国側の報告者と会見しました。席上、今回のシンポジウムが中日両国の建設的な互恵関係の構築と発展を促進するために少しでも有益な思考と建言を提出するように期待を寄せました。

山梨学院大学国際共同研究センター寄稿

2025 年 3 月 12 日